



衣川 実介

## 『しかまの市』

『春は曙。やうやう白くなりゆく山際（やまぎわ）、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢 飛びちがひたる。雨など降るも、をかし。秋は・・・』 『枕草子』の中の有名な文章です。受験勉強をした50余年前の若き日を思い出しています。

『枕草子』の「市づくし」の段に、辰（たつ）の市、椿市、飛鳥の市、など七つの市の一つとして『しかまの市』が登場します。平安時代中期に播磨地方の市がどうして都までその名をとどろかせていたのでしょうか。

それは『しかまの市』で売られていた特産品の『しかまのかちん染』です。藍染めの深い藍色が高く評価され有名になり、以下のように大勢の歌に歌われ、物語にも登場します。

『はりまなる しかまのいちに そむるとききし

かちよりこそは われはきにしか』

藤原輔相（ふじわらの すけみ）10世紀前半と考えられています。

『はりまのや しかまのいちに そめかすし

我がちにこそ 君をこひしか』

源重之（みなもとのしげゆき）は三十六歌仙の一人、10世紀後半に成立していた。

『清盛、其日の装束には、飾磨の褐（かち）の直垂（ひたたれ）に、黒糸綴の鎧（よろい）・・・』

『平治物語』鎌倉時代。

市の東を流れる小川（早川）が、『しかまの市』への物資と人員輸送に使われたことにより市川と名を変えました。市の近くは市之郷遺跡があり、中央には白鳳時代（645～710年）の創建とされる市之郷廃寺があります。『しかまの市』はこの付近にあったと推定されています。

羽柴秀吉が天正 5年（1577）に播磨を平定、織田信長に献上した品の目録にはなめし革や杉原紙と共に「飾万カチ布千反」が記載されています。500年以上続いた藍染も、江戸時代には、その染め技術を伝える家はすでに無くなっていました。

江戸時代綿業の殖産政策等により姫路藩の財政を劇的に改善した、家老 河合寸翁は『しかまのかちん染』復元にあたり、室町期の舞衣を参考にしました。復元された袱紗は絹製で、雌雄の鹿がそれぞれ一匹ずつ裏表に表され、その部分も地よりやや薄い藍に染められているため、よく見ないと見逃してしまうほどの意匠です。

中世の地図、国府の渡し付近を流れる川に『藍染川』『青見川』『むらさき川』など、藍染めをした地区の面影を偲ばせています。



褐衣 鎌倉時代 東寺藏  
河合寸翁が復元の参考に

### かちん染の研究

著者 山本 和人

姫路美術工芸館紀要 1

参考図書

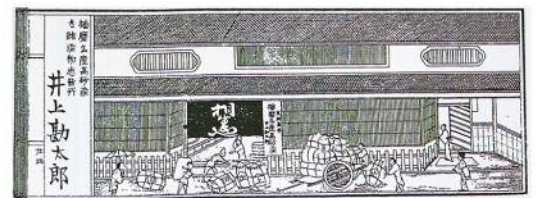
姫路美術工芸館紀要 1

姫路市書写の里・美術工芸館

平成12年2月

かちん染の研究……………山本 和人

姫路市書写の里・美術工芸館



河合寸翁の復元に協力した  
明治期の相生屋

読みにくい文字 藍染（あいぞめ）、  
袱紗（ふくさ）、舞衣（まいぎぬ）  
河合寸翁（かわいすんのう）：  
江戸時代後期の姫路藩家老  
天保12年（1841）没